OECD 東北スクールの生徒チーム

チーム 環

私たちは過去を超えます。
常識を超えます。
国境を超えます。

チーム環のロゴマークは、深い悲しみを乗り越えて、15の地域が未来に向かって団結する様子を表しています。

私たちは、2011 年 3 月 11 日の日本の東日本大震災で被災した東北地方の中学生・高校生約 100 名による〈チーム環〉です。私たちの多くは震災や津波、原発事故でで家や地域を失い、家族や友だちと別れ、今日まで多くの苦しみと悲しみを経験してきました。

私たちは、OECD 東北スクールに結集し、地域や世界について多くのことを学び、たくさんの友だちとつながり、地域の復興のために奮闘してきました。

そして、2014 年 8 月 30 日・31 日に、パリのシャン・ド・マルス公園を中心に、パリ市やパリ在住の多くの方々の協力の下に東北の魅力を世界にアピールするイベントを開催することになりました。このイベントで私たちの思いを伝えるとともに、未来を信じることのすばらしさをお伝えすることができるでしょう。

OECD 東北スクール〈チーム環〉代表　佐藤　陸

皆さんと、この「ミッション・ポッシブル」に乗り出すことができ光栄です。

皆さんは、東日本大震災の悲劇を経験し、勇気と決断ではね返してきました。私たちは皆さんから多くのことを学ばなければなりません。
それは、私たちが未来をかちとり新しい地平線にたどり着くため、生涯にわたる学びを通してです。

あなた方は OECD 東北スクールの生徒として、美しい地域と国を取り戻し想像的・創造的な努力を発見するよう世界に訴える大使です。

学習には境界がありません、それは世界への入口です。

OECD 教育局　局長　バーバラ・イッシンガー

Barbara Ischinger

OECD 東北スクール

OECD Tohoku School

http://www.oecd-tohoku-school.com

プロジェクト統括責任者　三浦 浩喜（福島大学教授）
General Project Manager　Hiroki Miura(Professor Fukushima Univ.)

OECD シニア政策アナリスト　田熊 美保（OECD パリ本部教育局）
OECD Senior Policy Analyst　Miho Taguma(OECD Paris Headquarters)

運営事務局　七島 貴幸
〒960-1296　福島市金谷川 1 番地
福島大学内
Tel/Fax: 024-503-3803
Email: tohokuschool@gmail.com

OECD 東北スクールでは、運営資金確保のため皆様からのご寄付を受け付けております。

ご寄付は福島大学の中に開設した OECD 東北スクール専用口座に振り込まれます。
ご寄付は、①奨学寄付金の申し込み・相談（TEL:024-548-8101 E-mail：ningen@adb.fukushima-u.ac.jp）
→②書類作成方法等の案内→③書類の送付→④寄付金の納入→⑤領収書の送付、のプロセスとなります。
詳しくは、http://gakujyutu.net.fukushima-u.ac.jp/category/cat-id15/ をご参照ください。

ミッション・ポッシブル：2014 年、東北の魅力をパリから世界へアピールせよ！

東日本大震災からの教育復興プロジェクト

OECD 東北スクール

OECD TOHOKU SCHOOL

March,2012,Tohoku
≫August,2014,Paris

http://www.oecd-tohoku-school.com

OECD
BETTER POLICIES FOR BETTER LIVES

国立大学法人 福島大学
Fukushima University

「このままではいけない」という始まり

震災以来、福島は津波・放射能汚染・健康被害……様々な不安が私たちを襲いました。しかし今、私たちの生活は震災前と変わらない、穏やかな生活に戻ったように見えます。

しかし、心には傷跡が残ったままで、心のどこかにぽっかり穴が空いているような気持ちのまま、それでも静かに過ごせるのなら、それだけで十分というあきらめがあり、放射能汚染に不安を残したまま、中途半端な気持ちで、毎日を過ごしているような気がします。

そんな時、「ＯＥＣＤ東北スクール」へ参加し、他の県の震災被害に遭った友達とたくさん出会うことができました。話を聞くだけで涙が止まらないような、私の想像以上の経験をした友達がたくさんいました。それでもみんながんばっていました。現実を受け入れ、乗り越えようとしていることは、とてもたくましいと思いました。

私たち、伊達市は、他の被災地とは違う、放射能汚染とたたかっています。先の見えない風評被害に過度の被害妄想まで加わって、畑仕事が生きがいだったお年寄りの人たちまで、ひっそりとしてしまったような気がします。

しかし私たちは、これからますます重くのしかかるであろう風評被害とたたかっていかなければなりません。もう一度、野菜や果物、食べ物の豊富な福島県を取り戻さなければいけないのです。

私にとって「東北スクール」は、「このままではいけない」という始まりです。今まで不安そうな親や大人の方たちを、ただ見ていただけだった私たちに、何ができるだろうか。この大好きな福島のために、何をしなければならないのだろうか。この東北スクールに参加させていただき、たくさんの大人の方々の協力を得て、私たちに今できる最高のことを考えていきたいと思う。

「震災」という敵に押しつぶされないように。

（第１回集中スクールの感想から　佐藤優里奈さん）

2011 年 3 月 11 日、東北地方東の海岸線上で、約 2 万人もの尊い命が失われた
しかし、その海岸線の上で何倍もの人々の命も救われた
生と死の境界線
絶望の境界線から 希望の境界線へ

シンボル〈生命の葉脈〉の中心は、津波の直撃を受けた東北地方の海岸線を表している。

いわき生徒会サミットチーム

チームが 30 名あまりと、もっとも規模が大きいことから、OECD 東北スクールプロジェクトのエンジンとして活躍しています。全体リーダーを始め、4 つのテーマ別担当リーダーもすべていわきチームから出ています。地元いわき市の津波被害や風評被害からの復興を話し合っています。

伊達市合同チーム

原発事故による風評被害により、特産の果物がほとんど売れなくなってしまいました。私たちは大人たちに元気を与えようと、農協と協働して地元の果物を使ったゼリーの開発を進めようと考えました。するとこのアイディアが実現し、ゼリーが商品化されることになりました。パリの有名シェフにも試食してもらい、「とてもおいしい！」という感想をいただきました。

大熊中学校チーム

中学 3 年生（2013 年）ばかりのチームです。私たちは原発事故によって地域を失い、内陸部の会津若松市に避難しています。地域がないために、セルフドキュメンタリーの映像の記録や編集をしたり、企業への協力のお願いレターを出したりしています。会津出身の新島八重をテーマにした短編映画を企画中です。

相馬高校チーム

放送・演劇部が参加しています。震災後、津波被害と原発事故の被害とで悩む苦しむ高校生の姿を脚本化し、演劇を上演して多くの賛同の声をいただいてきました。相馬は震災直後、地元に伝わる「相馬野馬追い」が復活し、大きな希望を得ました。パリでその騎馬武者行列を行うのが夢です。

安達高校チーム

自然科学部のメンバーです。福島県の中通りは事故を起こした原子力発電所から離れていますが、放射能の汚染があちこちに見られ、風評被害が深刻です。私たちは、この放射能を科学的に調査し、風評被害をはねのけるのが東北スクールでの目的です。コミュニケーションチームとしてロゴのデザインやホームページも担当しています。

女川向学館チーム

津波被害が大きかった沿岸部から参加しています。NPO の方と協力しながらがれきでアートとして表現したり、廃油でつくったキャンドルを、地元商店街を活性化させるイベントに活用したりしてきました。今も続いている被災地での復興のがんばりを感じてもらいたいです。

大槌チーム

私たちの地域も津波で、何もかも流されてしまいました。地元では高校生が中心になって大槌に長く伝わってきた伝統芸の保存活動を行っています。私たち中学生は、大槌の「過去・現在・未来」を伝える写真展を企画しています。

南三陸・戸倉地域チーム

津波の被害で街が壊滅し、特産の牡蠣も壊滅的な被害を受けてしまいました。私たちは地元の漁業協同組合と協力し、牡蠣小屋を復活させ、地元を復興させようと活動してきました。これからパリや国内の方と協力し、私たちの地域の牡蠣を全国で食べてもらうことが目標です。

チーム気仙沼

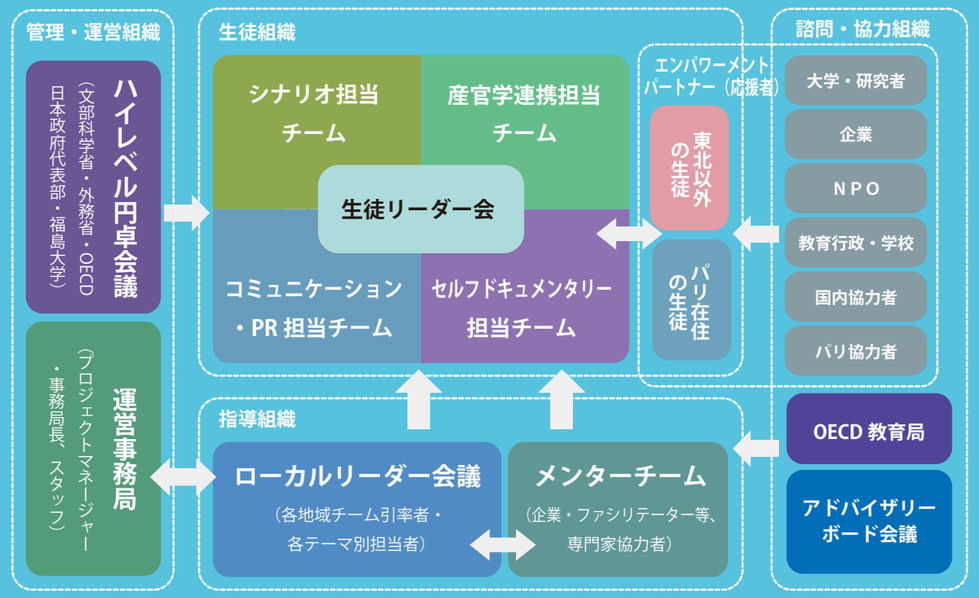
第３回集中スクールの開催を機に、メンバーの数が倍に増えました。私たちの地域はウニやフカヒレなど、漁業で賑わっていた町なので、その「気仙沼のめぐみ」を発信していきます。また、気仙沼復興の象徴である天旗（凧のこと）をパリの青空の下に揚げるのが夢です。

OECD 東北スクール

●地域スクール

伊達市合同チームと交流するＯＥＣＤ教育局アンドレアス・シュライヒャー氏。伊達市合同チームは、風評被害をはねのけるために地元 JAと協働して地元の果物を使ったゼリーを開発した。

●OECD東北スクール組織



●テーマ別活動

シナリオ担当チーム	パリでの最終イベントのとりまとめを行っています。各地域チームから上がってきたイベント案を整理して、全体が、テーマ「死と再生～未来へとつなぐ～」を象徴する巨大な物語になるように、多くのプロの方と協力してつくりあげます。
産官学連携担当チーム	OECD 東北スクールに協力して下さる企業や自治体、個人の方などをつなぐ仕事をしています。プロジェクトの紹介を行ったり、具体的なご協力の内容を交渉したりして、プロジェクトがスムーズに進むようにがんばっています。
コミュニケーション・PR 担当チーム	チーム〈環〉の中のコミュニケーション環境を整備したり、一般の方への PR のためのホームページやポスターの作成などを行っています。これから全員が iPad を使って、コミュニケーションを活性化させていきます。
セルフドキュメンタリー担当チーム	チーム〈環〉の活動を記録し、編集し、発信していくことが目的のチームです。いつもビデオカメラを片手にして、プロの方のご指導をいただき、被災地の撮影ツアーなども行っています。

■OECD東北スクールとは

2011年3月11日、日本の東北地方一帯を巨大地震が襲い、海から巨大津波が押し寄せ、沿岸部を中心に死者・行方不明者約2万人という甚大な被害をもたらしました。さらに翌日には東京電力第一原子力発電所が水素爆発を起こし、全世界に衝撃を与えました。

同年4月、OECD（経済協力開発機構）事務総長が来日し、東日本大震災からの復興に協力することを約束しました。そして、文部科学省、福島大学と協議を重ね、復興教育プロジェクト「OECD東北スクール」が生まれました。

OECD東北スクールは、震災に襲われた福島、宮城、岩手の中学生・高校生約100人が集まり、2年半にわたる集中スクールと地域スクール、テーマ別活動を経て、「2014年8月、パリで東北の魅力を世界にアピールするイベントをつくる」という、未来を取り戻すプロジェクトです。

プロジェクトを支えるのは、政府を中心としたハイレベル円卓会議、有識者からなるアドバイザリーボード会議、地方行政機関、NPO、企業などの関係団体で、福島大学に設置された運営事務局がプロジェクトを進めます。OECD教育局は、諸外国の教育先進事例や復興事例をとり入れながら、復興支援教育の中身を構築していきます。

プロジェクトの目的は、復旧に留まらず「新しい東北・日本の未来」を考え、東北地方の経済活性化に必要な産業やイノベーションを生み出すための人材育成です。そのため、生徒たちが主体性を発揮し、地域の復興を考え、自らの考えを実行に移し、イノベーションを生み出す力を育むようさまざまに「仕掛け」をしていきます。例えば、生徒のリーダーシップ、企画力、創造力、建設的批判思考力、実行力、交渉力、協調性、国際性など。これらは、21世紀というグローバルな、多様性に富む、知識基盤型社会における OECDキーコンピテンシーと呼ばれています。

2年半にわたる被災地の生徒達の「未来探しの旅」が続いています。

■2014年までの大まかな流れ

ＯＥＣＤ東北スクールは次のように開催されます。

●**集中スクール**……5回の集中ワークショップ（約1週間）を開催し、多彩な講師による体験活動や熟議を行います。参加者全員の全体会となり、参加者は、各地域や学校ごとにチームとして参加し、引率者も主要なメンバーとなります。

●**地域スクール**……各地域ごとに各地の状況に応じて、若者からの地域復興を企画・実行する地域スクールを行います。週末の活動や総合学習の一環として、また放課後の活動として月2回程度行われています。

●**テーマ別活動**……パリでのイベントを成功させるために「シナリオ担当」「産官学連携担当」「コミュニケーション・PR担当」「セルフドキュメンタリー担当」の各活動を行います。地域をまたいでダイナミックに展開します。

●**2014年イベント**……東北の復興を世界にアピールするプロジェクトの最終ゴールです。自分たちで内容を企画し、実施するための資金を調達したり、そのための広報活動を行ったり、自分たちの活動を記録したりと、様々な人々と協力しながら、ゴールをめざします。

OECD 東北スクール

チーム環の誕生

池上彰氏のワークショップ

ポスターの制作

内田和成氏のワークショップ

火を囲んでレクリエーション

プレゼンテーション

女川チーム地域スクール

大槌チーム地域スクール

未来への思いを形に―磯崎道佳氏のワークショップ―

第３回集中スクールに集う仲間たち

Gad 氏を囲んで

イベント案の検討

■第１回集中スクール――チーム〈環〉の誕生

80 名の中高校生がいわき市に結集しました。自分たちの地域の復興を真剣に考え、かつ、これからの地域復興をになうために多くのことを学び国際的な視野を得たいという若者達です。友達や家族を亡くしたり、一夜にして地域を失ったりした悲しみや苦しさを微塵も感じさせることはありませんでした。東京と奈良からもエンパワーメントパートナーとして高校生が参加し、友情の輪が広がりました。

オープニングセレモニーの冒頭にＯＥＣＤ教育局長バーバラ・イッシンガー氏から「ミッション・ポッシブル：2014 年８月にパリで東北の魅力を伝えるイベントを開催せよ！」というプロジェクトのゴールが示され、２年半にわたる長い旅が始まりました。

多くのワークショップでは、プロジェクトの遂行には発想の転換が必要不可欠だということが多様に示されました。「座ったまま悩むな、動きながら考えよ」という言葉がとても印象深く、どの生徒にも深く刻み込まれました。

Gad Weil 氏（国際的イベントプロデューサー）によるワークショップが行われ、全員が一つの輪になって議論しあいチームの名前を決めました。名付けられたチーム名は「環」。被災地同士が、あるいは非被災地とも協力し合いながら一丸となって復興をめざすという思いが託された名前で、全員で肩を組み「wa～」と叫んだその瞬間は極めて感動的なものでした。

「今まで自分が一番悲惨だと思っていた、しかし他の地域の人たちと交流できて、他の人ががんばっている姿を見て勇気が湧いてきた」と多くの生徒達が感想文の中で述べています。こうした関係作りが、新たな可能性を生み出してくれるかもしれません。

■第２回集中スクール――僕たちは何も知らなかった

第２回ＯＥＣＤ東北スクールの目的は、大きくは１回目に出したイベントのアイディアをすりあわせ、チーム〈環〉としてベストのものとなるよう絞り込んでいくことです。それには、対立を恐れず粘り強く議論し合う態度と、ものごとを論理的に考え、本来の目的に立ち返りながら正しく判断することが必要です。

ディスカッションがなかなか前に進まず、約束した時間内にみんなの意見をまとめることができません。時間内に決めることができなければ、パリでのイベントもなくなってしまいます。「私たちに時間をください。夜の自由時間もいりません。このままの形では何も決定できないので、リーダー会で原案をつくらせてください！」という生徒達の声……。真のリーダーが生まれます。

生徒達が決めることができなかったのは、中身だけを決めても意味がないという点に気づいたということと、それを何のためにやるのか、そのために今自分たちに何ができるのか、それらが「あまりにもわからないことだらけだった」という気づきに結びつきます。

福島県立博物館長の赤坂憲雄氏の「東北とは何か」というワークショップでのこと。氏によれば、生徒達が発案したものは、偶然にも東北の祭の根底に流れている「死と再生」の主題が共通しているというものでした。私たちのプロジェクトに魂が注ぎこまれました。

■第３回集中スクール――広がるネットワーク

イベント案を決められなかったという失敗体験は、より緊密なコミュニケーションの必要性につながりました。第２回集中スクール直後から毎月の生徒リーダー会議とローカルリーダーによる対面会議の開催、ほぼ毎週実施する Skype による担当別ミーティング、そして地域チームの Line などによる情報共有、企業や関係自治体との関係づくり、さらには日本とパリの間の連絡調整と、コミュニケーションのしくみが何層にも築かれました。地域スクールで企画した商品開発が実現したり、テーマ別活動が外部や企業から高い評価を得るなど、少しずつ成果が目に見えるものになってきました。３月を待たず、９月から第３回スクールは始まっていた、ということができます。

第３回集中スクールは、大きな津波被害に遭った宮城県気仙沼市で開催されました。２日目に懸案であったイベント案をとりまとめ、３日目には４つのテーマ別活動がそれぞれ計画をまとめ、プロジェクトのゴールに向けてのレールが敷かれました。その集中力やチームワークは会場を熱い空気で満たし、すべての参加者がその成長ぶりに驚いたと思います。

プロジェクト開始からちょうど１年が経過し、多くの生徒は既に中学生から高校生になっていました。集中スクールの最後に生徒達にこの１年間の感想を語ってもらいました。地域ではいまだに困難は続いていますが、OECD 東北スクールに参加すると仲間と希望を共有でき、自分の成長を感じることができ、今この時代を生きている意味を見いだしたという生徒達の声がとても印象的でした。